

美しさの追求

日本の伝統文化を研究している英国人の友人がいる。彼が来日して見聞したことがらの中で、最も驚きかつ不思議に思ったのは、東京の銀座通りだということ。商業広告や各種看板が洪水状態にある銀座通りに立ち、目に入る風景の醜悪さに接したとき、果してこれを生み出した現代の日本人は、千年にもわたって繊細な文化を育ててきた日本人と同じ民族とは到底思われず、この間に民族が入れ替わったのではないかと彼は（半分冗談に）主張している。

美意識の喪失

日本を代表する街路の一つである銀座通りは、社会の活気を反映しているので、それは一つの美しさとして認識すべきである、という反論はできる。しかし、現代の日本社会をみると、われわれの「美しさ」の基準が急速に変化した、あるいはもっと根本的には美的感受性が衰退した、という懸念がありはしまいか。

簡素で機能的な建築美として知られる桂離宮を生み出した美的感覚を現代の大都市の景観の中に発見しようとしても、それは容易でない。また、地下鉄やバスの中で「忘れ物のないように」という趣旨のアナウンスに平然として耐え続けているわれわれの耳は、繊細な美しさを持つ雅楽の伝統とは縁が切れているのかもしれない。さらにいえば、若者の会話において「．．．とか。」といった意味不明な終わり方が増えるだけでなく、テレビ出演者をみても、文意が逆接でないにもかかわらず「．．．けれども」を無神経に連発しているのを聞くと、情感を十七音に凝縮ししかも明瞭に伝える俳句の伝統とその関係はどうなったのかと考え込んでしまう。

外国人が日本文化を研究するという場合、現代のそれではなく伝統的日本文化を対象にする方が圧倒的に多い（ように筆者にはみえる）のは、誇張していえば、美を重んじない現在の日本が、一種の文化的危機にあることを示しているようにも思える。

美しさの条件

もちろん、美とは何かという問題は難問であり、いかなるものを美しいと見るかには文化的、時代的、個人的な偏差がありうる。だが、美には自然美、芸術美、機能美、人格美などいろいろの位相があるにもかかわらず、これらを統括する要素が認められる。

その第一の要素は、直感性だろう。美とは、対象の完全性が論証されたうえで納得される性質のものではなく、直接かつ瞬時に知覚されるものだからである。そして、いま一つの要素は、そうした感覚が成立するうえでは、美には一種の純粹性、あるいは最も本質的なことがらの凝縮であるという意味での本質性、が不可欠の条件になると思う。

つまり、美とは、最も純粹なもの、あるいは最も本質的な要素が直観されることにおいて見いだされるものだ、といえる。このため、一見して統一性が感じられないような景観に美しさはなく、また単なる饒舌やぼかしすぎた表現も美しさを欠くことになる。

ほんとうの学問には美しさ

より一般的にいえば、われわれが社会問題や学問上の理論を扱う場合にも対象の本質的要素を直観的に理解することが大切であることを考えると、それは美しさに通じる面があるといえまいか。

例えば、モノを交換する取引は経済学の基本テーマであるが、その交換が国と国をまたがり、現時点でのモノの交換を対象とする場合には、国際貿易である。一方、そうした交換が、現在と将来という異時点間にまたがり、交換対象が購買力である場合には金融である、と理解すれば、貿易理論と金融理論の構造的な類似性と両方の理論の本質が直観的によく見通せるようになるし、理論は美しさが増してくる（この点は拙著「現代金融の基礎理論」第一章、ボックスーの一で議論した）。

また、経済理論（線形計画や生産理論）において、生産費用を最小化する問題を解くことは、論理上、その裏側で利益を最大化する問題を同時に解くことを意味しており、その解は両方の問題に共通であるという定理（双対定理）がある。これも、定理としてエレガントであるだけでなく、企業行動の帰結とその含意に対する我々の理解を深めさせるものだろう。

さらに、分野がやや飛躍するが、数学においてオイラーの公式として知られる式、

$$e^{i\pi} + 1 = 0$$

は、全く驚異的な関係式というべきであろう。というのは、この式は、いくつかの基本的な値、すなわち自然対数の底（ e ）、虚数単位（ i ）、円周率（ π ）、数の基本単位（ 1 および 0 ）を一つの方程式としてまとめているからだ。これは、数学の多くの公式のなかでも究極の美しさを示す一つものといえるのではないかと思う。学術論文や学生を書くタームペーパーにしても、それが見通しのよい構造を持っている場合には、対象課題の本質についての明確な位置づけと洞察の深さを伴っている場合が多い。良い論文を書くことは、結局、理性と感性を統一的に発揮して初めて可能になるのではないか。

審美眼と大学教育

ものごとの直観的な理解、論理的明快さ、明晰な日本語、さらには嘘のない行動、などの基礎にはすべて一種の美しさがある。SFCに少なからず設置されている芸術系の授業科目（音楽、詩歌、色彩論等）は、芸術家を養成することを意図したのではなく、広い意味で学生に「直観」を磨かせること、あるいは美しさを追求する姿勢を涵養することを狙ったものである、と筆者は解釈している。

美的センスを磨くことは、最も深い意味において大学教育の重要な任務であると思う。

（慶應義塾大学SFCニューズレター「パンテオン」九巻一号、一九九八年七月）